

昨日の敵は 今日の友

「昨日の敵は今日の友」（敵同士で戦っていた者が今は味方同士となって仲良くしている。）

と、私は勝手な解釈をしている。

安倍晋三首相が上下院のアメリカ議会で歴史に残る演説《『希望の同盟へ』向かって》（2015年4月29日）は忘れることができない。

あの演説の中に「熾烈に戦いあった敵は、心の紐帯が結ぶ友になりました」というぐだりがあるが

《この時、アメリカ議会上下院議員合わせて500余名は立ち上がり、盛大な拍手が湧き起こる》。

「硫黄島の戦い」で当時23歳だったアメリカ海兵隊中尉、ローレンス・スノーデン海兵隊中将（現）は硫黄島守備隊司令官・栗林忠道氏のお孫さんの新藤義孝国会議員の手を力強く握りしめ演壇の我が安倍晋三首相に笑顔で謝意を表した。

これこそが、戦場で死力尽くして戦ったものだけが理解できる「尊敬」であり、「理解」であり、「許し」だろう。相手の

立場を「理解」し、「よく戦ったね」と互いに讃えあい「尊敬」しあえるから、「許しあい」、「和解」できるのだ。

スマートな 『和解』方式が主流

2016年12月26／27日オバマ大統領と安倍晋三首相はハワイで落ち合っており、安倍晋三首相は日本人総理大臣として初めて真珠湾を訪問した。



新藤義孝国会議員（左）と
ローレンス・スノーデン海兵隊中将（右）

安倍晋三首相は「二度と戦争の惨禍を繰り返してはならない。日米の和解の価値を世界に発信する機会にしたい」とのべている。

安倍晋三首相は「謝罪」もことさらしないが「謝罪」も求めてはいない。「謝罪」と言い出したら「賠償しろ!!」という流れになって不毛の理論の応酬になってしまう。だから、「相互理解」と「和解」なのである。この洗練された『和解』こそが『希望への同盟』への唯一の入口なのである。

「大東亜戦争」は日本が欧米の植民地支配をやめさせようとして起こした戦争だ。しかし少し前までは「大東亜戦争」を「太平洋戦争」「第2次世界大戦」と言い換えねばならなかった。

少し前まで「大東亜戦争」といえばまるで「右翼思想の持主のように白い目で見られたからだ。

これは、占領軍アメリカが日本人に罪悪感を植え付けようと【ウオー・ギルド・インフォメーション・プログラム】を実行したからである。

戦争に対する罪の意識を日本人に植え付け洗脳する計画のことで、これは検閲



東京裁判の被告席28名のA級戦犯

とともに、アメリカ軍の占領政策の柱だった。GHQは、日本が再び アメリカの脅威とならないよう、徹底した情報・教育面からの洗脳工作を行なった。

アメリカはこの戦争を起こしたのは「日本」だ。だから、「戦争責任はすべて日本人」にある。だから、「日本人は反省」しなければならない。

「焼夷弾」で非戦闘民を根こそぎ焼き殺したのも、原子爆弾を「小さい」(リトルボーイ)と「太った」(ファットボーイ)の「ウラン型」と「プルトニウム型」の2種類を人体実験させてもらったのも、日本人を「黄色いサル」としてやらせてもらったのでアメリカに罪はない。「ドイツ」や「イタリア」の白人で実験しろ、というのか?悪いのは全部黄色い日本人だ。

「東京裁判」は違法ではない。勝ったほうが負けたほうを裁いているだけで、当たり前のことだ。正しい裁判などするわけないだろう。

アメリカの行った国際法を破った非戦闘員以外を焼く尽くす、原爆で蒸発させてしまう、放射線で被爆して死んでしまう、ことが問題にならないようにアメリカ軍の戦争犯罪を問題にせず、ただ「日本人が悪いんだ」ということを東京裁判は無理やり示した。

そんなデタラメと残虐非道なアメリカ軍を許し、「和解」を確認し『希望への同盟』へと続いたのは奇跡なのかもしれない。